早稲田大学　教育学部　世界史　講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	出題形式・分量(記述式１０問・選択問題４０問の計５０問)とも去年と同じ。記述式は全問が基本的内容。選択問題のうち正誤判定問題は昨年に比べやや難化した。大問Ⅳは昨年・一昨年と西アジアだったが、今年はモンゴルだった。例年に比べ文化史の出題が少なかった。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
1	欧米近現代の著名政治家	Ⅰ・Ⅱ問が西洋史という枠組みは昨年と同じ。(４)－ｂの六月蜂起は国立作業場閉鎖に対する労働者の蜂起で、これを鎮圧したカヴェニャックと大統領選を争ったのがルイ＝ナポレオン。７のチャーチルは経歴が何かと出題される人物。南ア戦争への従軍に始まり、第１次大戦では海軍大臣だった。同じ保守党ながら対独宥和政策には一貫して反対した。	標準
2	中世ヨーロッパ	(１)のミラノ勅令の際のもう一人の皇帝は、用語集の説明文には出ている。消去法ではマクシミヌスも残ってしまう。(２)のコンスタンティノープルと(３)の『三位一体』は消去法で対処。(５)は難しい。レオ１世がアッティラと会見してローマを救ったことは知られるが、ヴァンダルは高校レベルではない。ｂ・ｃ・ｄの内容はともに西ゴートにあてはまる。７は消去法で対処。ｃのアンテミオスはコンスタンティノープルの城壁を築いた人物。サン＝ヴィターレ聖堂はマッシアーノだが、入試は西洋建築美術史の試験ではない。受験生レベルではない。(８)のグレゴリウス１世は６世紀末の教皇。モンテ＝カシノの修道院建設はイタリアに東ゴート王国が存在していた529年頃のこと。	難
3	古代中国・イスラーム世界の拡大	設問Ａの空欄補充と設問Ｂの(１)諸子百家は易しい。(２)の亀茲、(３)の南京の旧名「建業」と「建康」もありきたりのポイントである。(５)のドルーズ派はレバノンのシーア派。中東問題を詳しくやると出てくるが少々難しい。	易

番号	出題内容	コメント	難易度
4	モンゴル史	設問(ｃ)のノモンハン事件はロシア側では「ハルハ河戦争」ということを知っていると楽勝。文中の「モンゴル軍」は考えすぎる必要はない。いわゆるモンゴル人民共和国軍で事実上ソ連軍の支配下にあった。設問２－(４)のｅのカルピニが謁見したのはグユク＝ハン。(６)のチャハルは現在の中国内蒙古自治区。ハルハはモンゴル国にあたる。(７)－ｃの「青海の服属」が雍正帝時代のことを問う問題は法学部と文化構想学部でも出ていた。今年の早大では「青海」が大当たりであった。(10)－ｂのウズベクがソ連邦に加盟したのは1924年。	標準

〔総合コメント〕

記述式問題は基礎的内容なのでしっかり得点したい。記号問題のうち、正誤判定問題に判定ポイントの難しいものが目立つ。「誤っているもの」を１つ選ぶ場合、四択だと３つの文は正しいわけだが、その正しい内容に非常に一般的でない内容が含まれている(例　１－(２)グラッドストンの小英国主義・(４)のルイ＝ナポレオンのカルボナリ参加歴など)。こうして点を疑っているときりがなくなってしまうので、どちらかといえば、間違いが見つかったら自信をもって一本釣りした方がいい。語群選択で難しい答えを選ばせる場合(例　２－(３)のアウグスティヌスの著作『三位一体』)の大半は消去法で対応が可能。落ち着いて候補を絞り込みたい。大問Ⅳ、今年はモンゴル史だった。構成が変わらないものとすると、西アジア→西アジア→モンゴル(北アジア)ときたので来年は東南アジアかラテン＝アメリカ、またはアフリカか。あまり狙いすぎるのもよくないが、こうした地域には十分な準備が必要である。文化史は大幅に減ったが、来年は昨年並みにもどる可能性もある。準備は怠りないようにしたい。